

興味・関心のある部活動を柱に、様々な関係機関と連携してモチベーションを高め、登校日数が増えた事例報告

不登校生徒の状況

家庭環境が影響し、小学校の頃から登校しぶりが見られた生徒である。現在は、中学校 1 年生で 1 学期の欠席日数は 49 日だった。登校への一番のモチベーションは部活動であり、部活動があるときの出席率は高くなっている。部活動がきっかけとなり基本的な生活も整いつつある。

具体的な取組

○不登校に関する現状分析～学校生活の充実を目指して～

不登校となっている現状や原因を分析し、個々に合わせたアプローチを考えた。1 年次に状況を変えていく必要があると考え、当該生徒の興味・関心がある部活動を柱にして登校刺激を行った結果、欠席日数が減少した。

○不登校生徒や保護者への対応の充実～保護者との信頼関係の構築～

担任だけでなく部活動顧問も保護者と積極的にコミュニケーションをとることを意識した。休日には保護者は部活動の様子を見るために頻繁に見学に訪れてくれた。そこで、保護者への近況報告を行うなどもできている。学校との信頼関係は構築できている。

○校内体制の強化～学校全体での情報共有～

個別支援委員会を毎週水曜日に行い、活発な意見交換を行っている。管理職、生活指導主任、養護教諭、特別支援教育コーディネーター、SC、学年代表が出席し、様々な角度から支援方法を模索し、情報共有を行っている。

○SC、SSWや関係機関等との連携～支援を広げる取組～

学校だけの支援では不十分かつ限界があるため、児童相談所とつながり、家庭全体の支援も行っている。学校独自の支援にならないように共通理解を図っている。



成果

生徒一人一人に合った支援方法を考案することにより、登校につなげることができた。特に、家庭環境は重要であるため、関係機関と連携しながら支援を行えていることが非常に効果的だった。

課題

生徒一人一人に合った登校スタイルとは何かを考え、適切な支援を行っていくことの難しさを痛感している。

家庭連絡がつながりづらい生徒に対する不登校対応について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校入学直後から欠席が目立つようになった。朝、保護者は生徒よりも早く家を出なければならず、登校を見送ることができない環境である。さらに、ゲーム等によって生活リズムに乱れが生じるようになった。登校していない時に保護者に電話連絡しても、対応できないとの回答であった。

具体的な取組

○不登校生徒の情報収集

連絡なしで欠席するときには、担任や加配教員、S S Wが保護者に電話連絡して生徒の確認、つながらないときには家庭訪問を実施した。その結果、不登校傾向の原因が生活リズムと家庭環境であることが分かった。

○支援会議の実施

収集した情報を基に支援会議を実施し、対応策を検討した。保護者と連携し、電話連絡の時間を調整したり、生徒本人から学校に連絡するようにしたりすることで学校とのつながりを維持した。

○不登校生徒への対応の充実

生徒とのやり取りを進めていく中で、午後からの登校や短時間の登校など生徒に応じた登校方法を提示した。部活動のみの参加も認めることで、登校におけるハードルを下げ、少しずつ登校ができるようになった。

○魅力ある居場所の提供

部活動のみの登校などを継続することにより、生徒間の関係ができ、部活動が生徒の居場所として定着した。

宿泊行事の準備で生徒の関係を考慮して班編成を行い、主体的に関われるようにした。



成果

支援会議を中心に担任や部活の顧問等と問題意識を共有し、個に応じた対応に努めた結果、生徒の登校意欲の向上につながった。遅刻はあるものの、週 3、4 日は登校できるようになった。

課題

不登校生徒に対する支援を継続しつつも、改善傾向にある生徒の支援も必要であり、校内組織の充実が課題である。